２０１３年度　修士論文

ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係
―大学ゴルフ部員に着目して―
A study on the relationships between life skills and golfers performance: In case of college Golfer's:

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツビジネス研究領域

５０１２Ａ０２９－２

斉藤　麗

研究指導教員：　木村　和彦　教授

目次

第１章　序論 1

　第１節　はじめに 1

第２章　先行研究の検討 3

　第１節　スポーツとライフスキルについて 3

　第２節　ゴルフパフォーマンスについて 4

　第３節　縦断調査について 6

　第４節　先行研究の精査 8

第３章　本研究の目的と構成 9

　第１節　研究目的 9

　第２節　研究枠組みの提示 9

第４章　調査概要 10

　第１節　用語の定義 10

　　第１項　ライフスキルとは 10

　　第２項　ライフスキル尺度とは 10

　　第３項　ゴルフパフォーマンスとは 10

　　第４項　ハンディキャップとは 10

　第２節　質問紙の作成 11

　　第１項　ゴルフパフォーマンス尺度について 11

　　第２項　ライフスキル尺度について 12

　第３節　調査方法 13

　　第１項　調査対象 13

　　第２項　調査時期 14

　　第３項　調査内容 15

　　第４項　調査の手続き 15

第 4 節　分析方法 16
第 1 項　尺度の妥当性と信頼性の分析方法 16
第 2 項　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスにおける関係性の分析方法 16
第 3 項　ゴルフパフォーマンスとライフスキルにおける関係性の分析方法 16
第 5 章　結果 18
第 1 節　各尺度の妥当性と信頼性の検討 18
第 2 節　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの関係 21
第 1 項　基本的属性 21
第 2 項　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの重回帰分析結果 22
第 3 節　ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係 23
第 1 項　基本的属性 23
第 2 項　各変数の基本統計量 24
第 3 項　2 波の交差遅れ効果モデルの結果 24
第 6 章　考察 29
第 1 節　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの関係についての考察 29
第 2 節　交差遅れ効果モデルにおける各変数の基本統計量についての考察 30
第 3 節　変数間の因果関係についての考察 31
第 4 節　ゴルフパフォーマンスを起点とする因果関係についての考察 31
第 5 節　ライフスキルを起点とする因果関係についての考察 33
第 7 章　結論 36
第 1 節　本研究によって得られた知見 36
第 2 節　研究の限界 37
第 3 節　今後の課題 38
注 40
引用・参考文献(50 音順) 42

資料　アンケート 46
謝辞 48

第１章　序論

第１節　はじめに

ゴルフ人口はスポーツライフデータ(2010)[12)]によると、推計人口 966 万人といわれている。これは日本の成人人口の約 1 割を占める値である。近年では、世界最高峰といわれているアメリカツアーに参戦する日本人選手が増加している。またアメリカツアーにて日本人選手が優勝するなど世界に通用するようなプレーヤーが見受けられるようになってきた。また最近では、石川遼、松山英樹といった若手プロゴルファーの出現により、人気スポーツとなっている。また彼らは実力があるだけでなく、ルックスや受け答えの良さなども高い評価があり、ゴルフ界に一石を投じたと思われる。そのこともあり、ゴルフの普及において競技者のパフォーマンス向上はもちろんのこと、身の振る舞いも重要な要素である。

しかしながらプロゴルファーによる窃盗事件(日本経済新聞,2012 年 11 月 16 日)[43)]、スコアの改ざん(日本経済新聞,2006 年 9 月 20 日)[41)]、無免許運転(日本経済新聞,2011 年 7 月 21 日)[42)]、ミスした際にクラブを叩きつける(日刊スポーツ電子版,2011 年 10 月 23 日)[39)]といった、不祥事が後を絶たない。このことから、ゴルフ選手の日常生活における、様々な問題に対する適切な処理が出来ていないと考えられる。そのため、その点について再検討する必要がある

ところで、日常生活で生じる様々な問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するための能力はライフスキルと表現される(WHO,1997)[13)]。清水・島本(2012)[28)]によると、競技成績が高い者はライフスキルを獲得していると述べるなど、競技力とライフスキルには大きな関係があることが指摘されている。例えば、日本経済新聞(2013 年 1 月 26 日)[44)]によると、昨年の箱根駅伝で優勝した日本体育大学の駅伝部監督は、一昨年の大敗からチームを立て直すために、日常生活から見直したと述べている。また、東北福祉大学ゴルフ部監督は、生きていくために何を学び、どうすればいいかを考えさせる指導を行い、学生ゴルファーを一人の人間として育てていると述べている(松本,2012)[46)]。さらにゴルフの試合で実

力を発揮するために、競技場面における心理的スキルだけでなく、日常生活も選手のスポーツパフォーマンスや実力発揮に影響を与える要因である（グラハム・白石, 1992）[21]という指摘があるが、残念ながら、これらのチームマネジメントや考え方は実証されたものではない。

このことから、ライフスキル獲得の重要性を、理論的な説明とともに、ライフスキルの獲得が実際どのようなパフォーマンスと結びつくのかについての詳細な説明が求められていると言えるだろう。ライフスキルとパフォーマンスの関係が説明できることで、選手に対して日々のスポーツ活動を通じて日常生活で役立つスキルを学び、そのスキルが競技力の更なる向上に寄与すると考えられる。また指導者にとっても、選手を導く方向を明確に持つことが可能となるだろう。そして、そのような知見は日本のゴルフ界にとって、全体的なレベルの底上げになりうるといえる。

第２章　先行研究の検討

第１節　スポーツとライフスキルについて

近年、スポーツがライフスキルの獲得や向上に貢献する場として期待されている(鈴木・中込,1988)[31]。ライフスキルとは日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的な対処をするために必要な能力であり、心理・社会的スキルで構成されている(WHO,1997)[13]。杉山(2004)[30]によると、スポーツ場面で獲得可能な心理・社会的スキルは、ライフスキルそのものと見なすことも可能であるという視座から、スポーツ場面におけるライフスキルについて論議されるようになっている。

そこで、上野・中込(1998)[17]は、スポーツ場面において獲得可能な心理・社会的スキルとスポーツを離れた日常生活場面で必要とされるライフスキルとの関係に注目し、運動部活動に参加している生徒は参加していない生徒よりもライフスキルを獲得していることを明らかにしている。さらに上野(2007)[16]はスポーツ活動への参加とライフスキル獲得の関係を、スポーツ経験を通じて獲得可能である心理社会的能力は、日常生活に般化可能であると述べている。このように従来、スポーツ活動への参加を通じたライフスキル獲得に関する研究では、スポーツ経験がライフスキルの獲得をはじめ、個人の好ましい発達に与えるものとしてとらえられてきている。(Murakami et al.,2004;Papacharisis et al.,2005)[7][9]。

スポーツ経験とは多種多様な捉え方があるが、島本・石井(2008)[26]は、運動部活動のスポーツ経験を多様な側面から探索的に検討するために、大学の運動部活動におけるスポーツ経験を５つの側面(自己開示、指導者からの生活指導、挑戦達成、周囲からのサポート、努力忍耐)から捉える尺度を開発した。またライフスキルにおいても、研究者によって定義の仕方は様々だが、島本・石井(2006)[25]は、WHO(1997)[13]をはじめとする、国内外の複数の先行研究をもとに、効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の働きと定義し、日常生活スキル尺度（大学生版）を作成した。この尺度は、学生が持つライフスキルを多面的に測定できる多次元の尺度であり、８つの側面、すなわち①計画性②情報要約力③自尊心④前向きな姿勢⑤親和性⑥リーダーシップ⑦感受性⑧対人マナーから構

成され、それらは個人的スキル(①～④)、対人スキル(⑤～⑧)に分類されるとしている。この個人的スキル、対人スキルという分類は、国内外の複数の先行研究(Danish,2002;Danish et al.,1993;上野・中込,1998)[1)2)17)]においても認められるものである。

スポーツとライフスキルの関係について、これまでにも国内外において数多くの研究が行われているが、未だ統一された結論は提示されていない（上野・中込,1998)[17)]。そこで、前述したスポーツ経験尺度、日常生活スキル尺度を用いて、スポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係を島本・石井(2010)[27)]は3波の交差遅れ効果モデルによる縦断調査を行った結果、スポーツ経験はライフスキルの獲得に繋がると仮定する従来の研究の方向性は支持され、ライフスキル獲得により、運動部活動におけるスポーツ経験が促進されるといった、これまでの研究の焦点とは異なる関係も成立していることも示唆している。さらに自己開示と対人スキルとの間に双方向の正の因果関係が存在している可能性を示唆し、これらが循環的なものであることを指摘した。

また清水・島本(2012)[28)]は、大学レスリング競技者を対象に競技成績とライフスキル獲得との関係を検討した結果、目標設定、考える力、最善の努力の 3 つの側面において、競技成績の高い群ほどライフスキルの獲得が高いことを明らかにした。これは従来のスポーツ経験とライフスキルの関係ではなく、競技成績とライフスキルといった新たな関係に着目した研究である。このようにスポーツ経験とライフスキルの関係について、縦断的調査を手掛かりに、ライフスキルを起点とする関係性についての研究が行われるようになっている。

第2節　ゴルフパフォーマンスについて

ゴルフは、スポーツ種目の中でも、特に他のスポーツと比べ、心理面の重要性を強く認識しているスポーツであると言われる（Pederson,2000)[10)]。そこで、Thomas and

Over(1994)[11]は、従来の一般的なスポーツ競技用の心理的スキル尺度ではなく、レーヤー(1987)[48]の心理的パフォーマンス尺度と Mahoney et al.(1987)[5]のスポーツ用心理的スキル尺度を参考に、ゴルファー特有のパフォーマンス発揮に関わると考えられる精神運動能力やコミットメントを加え、多次元的なゴルフパフォーマンス尺度を開発した。この尺度は、心理的スキルと戦略、精神運動スキル、ゴルフにおける熱中度の 3 つの尺度から構成されている。心理的スキルと戦略尺度は、ネガティブな情動・認知、心理的準備、堅実なプレイ、集中力、飛距離への挑戦の 5 つの下位尺度から構成され、精神運動スキル尺度は、自動化、パター技術、改善への探求の 3 つの下位尺度から構成される。またゴルフにおける熱中度尺度はコミットメントと言う 1 つの下位尺度か構成されている。

この尺度を用いて、Thomas and Over(1994)[11]は、技術水準との間に差があるかどうかを分析したところ、技術水準が高いゴルファーは、低いゴルファーに比べ、心理的準備、集中力、自動化、コミットメント、ネガティブな情動・認知で優れていることを明らかにしている。これらの結果は、ネガティブな情動・認知、心理的準備だけでなく、自動化、パター技術、改善への探求、コミットメントなどの精神運動スキルや、ゴルフへのコミットメントの概念を取り入れたゴルフパフォーマンス尺度の有用性を示唆している。

わが国においても、Nishida and Kato(1994)[8]がゴルファー対象の心理的スキル質問紙を作成している。しかし、心理的スキルだけでなく精神運動やコミットメントを含む観点から多面的にゴルフパフォーマンスを予測する日本語版はない。そこで平木・橋本ら(2006)[45]は、Thomas and Over(1994)[11]が作成したゴルフパフォーマンス尺度の構造における問題点や項目数の問題点を取り上げ、日本語版ゴルフパフォーマンス尺度の開発を行った。対象者は日本ゴルフ協会が公認する技術水準を示すハンディキャップの上限である 36 を基準に平均スコア 108 までの高校・大学の体育会ゴルフ部員、ゴルフ専門学校生、ゴルフコースやゴルフ練習場に通っているゴルファー男女とした。その結果、Thomas and Over(1994)[11]が作成した尺度同様、心理的準備と戦略尺度、精神運動スキル尺度、ゴルフ

へのコミットメント尺度の 3 尺度を作成した。Thomas and Over(1994)[11]と異なる点は、心理的スキルと戦略尺度において、集中力という下位尺度が存在したが、探索的因子分析を行った結果、因子を構成する 3 項目中 2 項目において因子負荷量が基準を満たすことができず削除し、新たに精神的強さという項目を作成した点である。平木・橋本(2006)[45]の尺度は、項目の精選を行い、項目数を減らすことで、モデル適合度も良く、ゴルフパフォーマンス尺度を今後の分析に使用することができる尺度であると述べている。

またこの尺度を用いて、ハンディキャップを独立変数、ゴルフパフォーマンス尺度得点を従属変数とし、一要因分散分析を行った結果、技術水準の高いゴルファーは低いゴルファーより、プレイに対する心理的準備を行い、精神的に強い、そして、ゴルフ技術を改善させようとする意欲も強く、プレイの自動化が確立されており、パター技術に対する自己評価も高い、さらにはゴルフに対するコミットメントがあることを明らかにしている。これらの結果から、ゴルフパフォーマンス尺度はゴルフパフォーマンスを予測する有用なツールとして用いることが可能であると指摘している。

第 3 節　縦断調査について

本章の第 1 節にて、縦断調査を手掛かりに、スポーツとライフスキルの研究に変化があることを示したが、縦断調査とは何か、先行研究を概観した。

一般に、変数 X が変数 Y の原因であることを示すためには、条件 1 : X と Y が共変動している、条件 2 : X が Y に時間的に先行している、条件 3 : X と Y の関係が疑似的なものではない（第 3 の変数の影響によるものではない）という 3 つの条件を満たす必要がある(Menard,1991)[6]。縦断調査を行うことで、条件 1 と条件 2 を同時に満たすことができ、変数をあらかじめ操作することなく、変数間の因果関係をある程度確からしく推定することが可能となる(高比良ら,2006)[33]。しかし狩野(2002)[20]によると、原因となる変数の時間的先行性は、因果推論における重要な概念であるという見解からも、原因となる変数が先行し

て推定される縦断調査は、変数間の因果関係を推定する上での有効な方法であると言うことができるだろう。

その縦断調査の形態については、研究者の興味に応じて様々な形態がとられている(高比良ら,2006)[33]。心理学、医学、マーケティング調査、政治意識に関する世論調査とさまざまな分野で広く用いられているパネル調査である。パネル調査とは、同一の対象者に、同一内容の項目群を、一定のインターバルをおいて 2 回以上実施していくものである(Finkel,1995)[3]。例えば、2 つの時点で測定を行うパネル調査に対しては、2 波のパネル調査という呼称が一般的に用いられている(高比良ら,2006)[33]。

またパネル調査によって得られたパネルデータは、主に図 1 に示す交差遅れ効果モデル(Cross-Lagged Effect Model)を用いて、構造方程式モデリング(SEM:Structural Equation Modeling)により、分析が行われている。交差遅れ効果モデルとは、1 時点目の変数 X と変数 Y の値が、1 時点目から 2 時点目への両変数の変化に因果的な影響を与えるかどうかを検討するモデルであり、2 つの変数が双方向に影響を与える可能性がモデルに組み込まれている。これまでにおける、交差遅れ効果モデルを用いた研究を概観すると、その多くが 2 波の交差遅れ効果モデルを用いて行われている(赤坂・坂本,2008;安藤ら,2005;岡林,2006;岡林ら,1998;高比良,2006;高比良ら,2006;西岡ら,2009)[14][15][18][19][32][33][38]。このことにより、最低限 2 時点のデータがあれば、変数間の因果関係を推定していくことが可能であると考えられる。

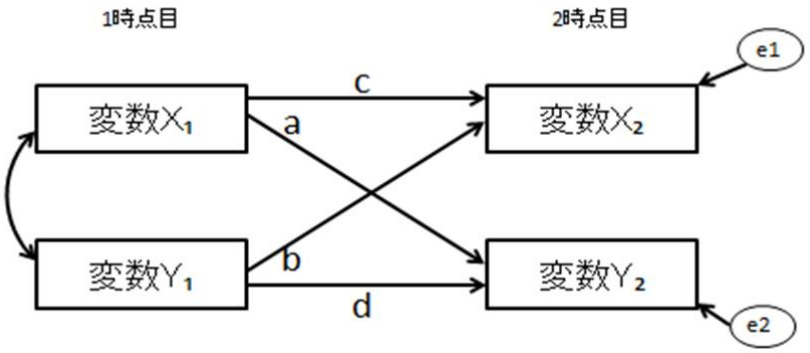

図 1　2 波の交差遅れ効果モデル　岡林(2006)[18]、西岡ら(2009)[38]より

第 4 節　先行研究の精査

従来、スポーツ経験とライフスキルについて数多くの研究がなされてきたが、縦断調査を手掛かりとして、ライフスキル獲得により、スポーツ経験が促進されるといった新たな方向性が支持されてきている。清水・島本(2012)[28]においては競技成績の高い群ほどライフスキルの獲得が高いことを提示するなど、ライフスキルがパフォーマンスに繋がる研究が確認されたが、今後の課題として、縦断調査を実施し、競技や種目ごとに競技成績と密接に関係するライフスキルの側面を明らかにする必要があると述べている。しかしながらトップレベルに焦点を当てていることは問題であり、幅広い競技レベルを対象とした研究が必要であると考える。

ゴルフパフォーマンスにおいて平木・橋本(2006)[45]は、心理的スキル、精神運動スキル、ゴルフの戦略、コミットメントといった要素を取り入れ 3 尺度から成るゴルフパフォーマンス尺度を構成し、ハンディキャップを予測するツールであると述べている。これらの要素はゴルフのレベルアップに必要な要因だと考えられるが、3 つに分ける必要があるのか、疑問が残る。そこで尺度を精査すると、全体の傾向として、ハンディキャップを予測する心理的スキルとして項目が形成されているように捉えられる。しかしながらゴルフパフォーマンス尺度は、ゴルファー各自が評価する尺度であること、ゴルフのレベルアップに必要な要因であることを踏まえると、パフォーマンスに影響を与える認知的スキルではないかと筆者は考える。

以上より、縦断調査を用いることで、2 つの変数の因果関係を推定することが可能であると述べていることから、平木・橋本(2006)[45]が作成したゴルフパフォーマンス尺度と、島本・石井(2006)[25]が作成した日常生活スキル尺度を用いることで、ライフスキル獲得によって、パフォーマンスに影響を与える認知的スキルの関係を測定することができるだろう。

第 3 章　本研究の目的と構成

第 1 節　研究目的

本研究において、ゴルフにおける技能を向上させるには、ゴルフに必要な能力を獲得するだけでなく、日常生活から見直す必要があることを提示するために以下の 2 点を実証的に明らかにすることを目的とした。

1. ゴルフパフォーマンスのどの要因がハンディキャップに影響を与えるかを明らかにする。

2. ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係について、どちらを起点として因果関係が成り立っているのか明らかにする。

第 2 節　研究枠組みの提示

本研究の目的に対し、研究の枠組みを提示する。まず STEP1 として、ゴルフパフォーマンス尺度と、日常生活スキル尺度について、妥当性と信頼性の検証を行う。その後、図 2 に示したように、STEP2 では、ゴルフパフォーマンスを獲得することで、ハンディキャップに影響を与えるのか検証する。STEP3 では縦断調査を用いて、ライフスキル獲得により、ハンディキャップに影響を与える要因となるゴルフパフォーマンスが向上されるのか検証する。またゴルフパフォーマンスを獲得することで、ライフスキルが向上するかについても検討する。

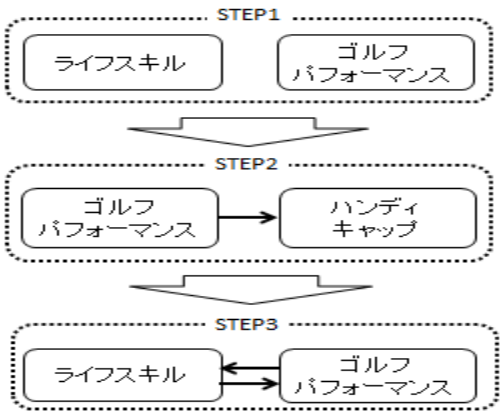

図 2　本研究の枠組み

第 4 章　調査概要

第 1 節　用語の定義

第 1 項　ライフスキルとは

ライフスキルとは WHO(1997)[13]によると、「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的な対処をするために必要な能力であり、心理・社会的スキルで構成されている」と定義している。先行研究を概観すると、そのほとんどの研究者が前述した定義を用いている。ライフスキルを測定する尺度を開発した島本・石井(2006)[25]も WHO(1997)[13]をはじめとする、国内外の複数の先行研究をもとに定義している。そこで本研究においても WHO(1987)[13]の定義を用いることとした。

第 2 項　ライフスキル尺度とは

島本・石井(2006)[25]が作成した日常生活スキル尺度だが、学生が持つライフスキルを多面的に測定できる尺度であると述べている。よって分析結果は、ライフスキルを測定するものである。そのため、日常生活スキル尺度として用いると、解釈がしにくいと判断したため、本研究ではライフスキル尺度として統一させることとした。

第 3 項　ゴルフパフォーマンスとは

平木・橋本(2006)[45]によると、ゴルフパフォーマンス尺度は技術水準を予測する心理的スキル、精神運動スキルで構成されていると定義している。しかし、第 2 章第 4 節で前述したように、すべての項目においてゴルフのレベルアップに必要な心理的スキルと考えられること、各自がゴルフパフォーマンスを評価する尺度であることを踏まえ、本研究では「ゴルフのレベルアップに必要な認知的スキル」と定義する。

第 4 項　ハンディキャップとは

ハンディキャップ(注 1)とは、個人の実力を日本ゴルフ協会が定める方法により算出されるものである。またハンディキャップは固定された数値ではなく、定期的にスコアを提出

することで、数値に変動があり、その時の実力を表す指標となっている。そのため本研究では「自身のゴルフの能力を客観的に表している数値」と定義する。

このように、ハンディキャップは各自の技能を評価するものであり、競技力の基礎をなすものと考えられる。なおハンディキャップという用語の定義はなされていないため、日本ゴルフ協会のホームページを参照し、筆者が独自に定義したものである。ハンディキャップは数値が低いほど、技能が優れていると判断される。

第2節　質問紙の作成

第1項　ゴルフパフォーマンス尺度について

平木・橋本ら(2006)[45]が作成した日本語版ゴルフパフォーマンス尺度について、スポーツ経営学を専攻する大学院生5名、教員2名、筆者の計8名にて質問項目について精査した。まず、ゴルフパフォーマンス尺度は心理的スキルと戦略尺度5因子、精神運動スキル尺度3因子、ゴルフへのコミットメント尺度1因子から構成されている。3尺度ともゴルフのレベルアップに必要な認知的ゴルフスキルと判断できるので、3尺度を1つにまとめ、9因子からなるゴルフパフォーマンス尺度に修正した。また 9 因子の中に「堅実なプレイ」という因子が含まれているが、因子の項目を確認すると、堅実なプレイではなく、リスクを回避する項目であったため、「リスク回避」因子と因子名を変更した。さらに「自動化」という因子は抽象的であり。ゴルフをプレイする時に自動化されているかという項目であったため「プレイの自動化」因子と因子名を変更した。

ゴルフパフォーマンス尺度として統一するために、精神運動スキル尺度に多く見られた「いつも」、「ふつう」といった頻度を尋ねる聞き方を削除した。また「私のスイングは型にはまっている」を「私のスイングは安定している」に修正した。さらに「私はラウンド中、ボールを(1球以上)なくすことがよくある」、「私のパッティングは不安定である」の項目について、先行研究では反転項目として使われていなかったが、議論したうえで反転項目と判断し、修正した。

先行研究では 5 段階尺度にて、「5:いつもそうである（90～100%)、4:しばしばそうである(75%)、3:ときどきそうである(50%)、2:ときたまそうである(25%)、1:ほとんどそうでない(0~10%)」という、頻度を言語にて評価する回答方法であった。しかしながらゴルフパフォーマンス尺度はゴルファー自身がレベルアップに必要な認知的スキルを評価する尺度であると定義したため、「4:とても当てはまる、3:やや当てはまる、2:あまり当てはまらない、1:全く当てはまらない」の 4 段階尺度に修正した。以上よりゴルフパフォーマンス尺度は「心理的準備」、「精神的強さ」、「飛距離への挑戦」、「リスク回避」、「ネガティブな情動・認知」、「改善への探求」、「プレイの自動化」、「パター技術」、「コミットメント」の 9 因子 35 項目で作成した。

表 1　ゴルフパフォーマンス尺度の概要

	因子名	項目数
ゴルフパフォーマンス	心理的準備	4項目
	精神的強さ	4項目
	飛距離への挑戦	3項目
	リスク回避	4項目
	ネガティブな情動・認知	4項目
	改善への探求	4項目
	プレイの自動化	4項目
	パター技術	3項目
	コミットメント	5項目

第 2 項　ライフスキル尺度について

島本・石井(2006)[25]が作成した日常生活スキル尺度について、スポーツ経営学を専攻する大学院生 5 名、教員 2 名、筆者の計 8 名にて質問項目について精査した。先行研究は 8 因子から構成され、高次因子として個人的スキル、対人スキルの 2 因子にて尺度を構成していたが、本研究ではより詳細な知見を得るため、8 因子 24 項目を採用した。4 段階の尺度について、先行研究では、「4:とても当てはまる～1:ぜんぜん当てはまらない」という回答

方法を採用していたが、「1:ぜんぜん当てはまらない」という言葉は何を指しているのか理解できないため、「1:全く当てはまらない」と明確にした。よって「4:とても当てはまる～1:全く当てはまらない」とし、ゴルフパフォーマンス尺度と統一させた。以上より日常生活スキル尺度は「計画性」、「情報要約力」、「自尊心」、「前向きな思考」、「親和性」、「リーダーシップ」、「感受性」、「対人マナー」の 8 因子 24 項目で作成した。

表 2　日常生活スキル尺度の概要

	因子名	項目数
ライフスキル	計画性	3項目
	情報要約力	3項目
	自尊心	3項目
	前向きな思考	3項目
	親和性	3項目
	リーダーシップ	3項目
	感受性	3項目
	対人マナー	3項目

第 3 節　調査方法

第 1 項　調査対象

本研究は学生ゴルファーの技能レベルに関係なく、ライフスキルとゴルフパフォーマンスとの関係に焦点を当てている。そこで調査対象校は、全国の大学の中でも関東学生ゴルフ連盟に加盟している大学を対象とした。関東学生ゴルフ連盟は大学加盟数が最も多く、全国各地の学生が集まり、様々なレベルの学生を対象とすることができると考え調査対象として選定した。また 1 部リーグに所属する、上位 3 校は日本リーグにおいて、トップ 5 に入賞する強豪校であり、競技成績も高く、プロゴルファーも多数、輩出している。また 1 部リーグの下位校から下部のリーグまでは様々な企業に就職する学生が多く見られることも選定理由である。

対象校の選定は、関東学生ゴルフ連盟に所属する大学に調査の依頼をし、返答があった

大学を調査対象校とした。以上により、対象校は1部リーグ5校、2部リーグ2校、4部リーグ1校の男子297名、女子89名の計386名を対象とし調査を実施した。各大学の詳細は表3に示したとおりである(結果として1部リーグ校が多くなった)。

表3　調査対象校の詳細

	大学名	男子	女子	合計
1部リーグ	A大学	55	13	68
	B大学	76	17	93
	C大学	45	8	53
	D大学	23	13	36
	E大学	21	6	27
2部リーグ	F大学	21	8	29
	G大学	26	7	33
4部リーグ	H大学	30	17	47
	合計	297	89	386

第2項　調査時期

大学ゴルフ部において最も重要視されるリーグ戦(注2)は春と秋の年2回実施される。またゴルフの競技は学生の試合のみならず、アマチュアの試合、プロの試合、海外の試合と4月から12月まで多種多様な試合が開催されている。そこで調査日程を考慮し、より多くのサンプル数を確保するため、対象校の監督・コーチと調査実施時期について検討した結果、リーグ戦、終了後の7月と11月に決定した。調査のインターバルを4か月に設定した理由は、スキル獲得にはある程度の時間がかかるという指摘(調枝,2001;Gould and Carson,2008)[36)4)]を踏まえ、図3のように、筆者が独自に設定したものである。

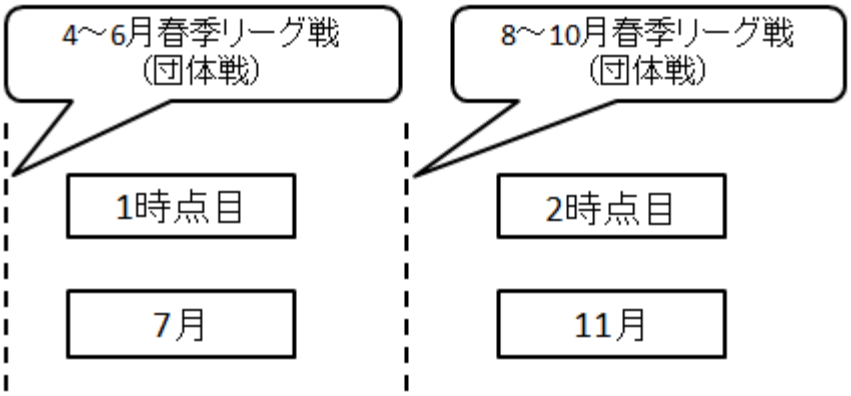

図 3　調査時期

第 3 項　調査内容

第 4 章第 2 節で作成したゴルフパフォーマンス尺度及び、ライフスキル尺度に、「名前」、「性別」、「年齢」、「学年」、「ゴルフ歴」、「ハンディキャップ」、「平均スコア」、「試合出場の有無」といった、基本的属性を調査内容とした。なお調査内容の詳細は巻末資料に掲載した。

第 4 項　調査の手続き

調査対象校を選定した後、筆者が試合会場に足を運び、対象校の監督・コーチに調査の概要、記入方法について説明を行った。また 2 回の調査実施日直前に、電話・メールにて再度、確認を行った。各大学とも月に 1 度行われるミーティング時に、監督・コーチ立会いの下、一斉法による集団実施を行い、その場で回収を行った。調査はすべて自己評価方式にて実施し、1 回目の調査は 2013 年 4 月から 1 回目までの様子をもとに回答してもらい、2 回目の調査は、1 回目の調査から 2 回目までの様子について回答してもらった。回収後、チームとしてまとめて郵送にて返送してもらった。

またデータ入力の際、不備があるか否か確認するため、ゴルフパフォーマンス尺度の「私はグリーンを読むのが得意である」という項目を反転し、「私はグリーンを読むのが苦手である」という項目を設置し、この両項目に対して矛盾がなかったデータを有効回答とした。

第 4 節　分析方法

第 1 項　尺度の妥当性と信頼性の分析方法

STEP1 として、質問紙で作成したゴルフパフォーマンス尺度及び、ライフスキル尺度について、妥当性と信頼性を検証する。1 回目の調査終了後、ライフスキル尺度、ゴルフパフォーマンス尺度に不備なく回答した、298 名を有効回答とし、確認的因子分析により妥当性を検証し、Cronbach α 係数により信頼性を検証した。

第 2 項　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスにおける関係性の分析方法

STEP2 として、1 回目の調査終了後、ハンディキャップとゴルフパフォーマンス尺度に不備なく回答した 171 名を有効回答とし、ゴルフパフォーマンスを独立変数、ハンディキャップを従属変数とし、重回帰分析を行い図 4 に示すモデルの検証を行った。

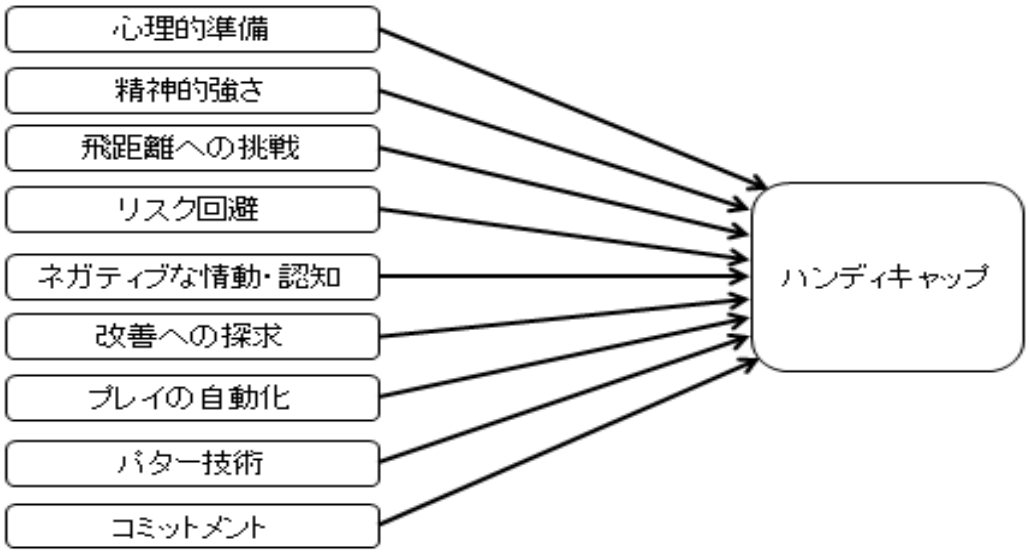

図 4　STEP2 における分析モデル

第 3 項　ゴルフパフォーマンスとライフスキルにおける関係性の分析方法

STEP3 として、2 回の調査終了後、ゴルフパフォーマンス尺度、ライフスキル尺度に不備なく回答した 217 名(有効回答)を対象に分析を行った。ゴルフパフォーマンスには観測変

数としてゴルフパフォーマンス尺度である「心理的準備」、「精神的強さ」、「飛距離への挑戦」、「リスク回避」、「ネガティブな情動・認知」、「改善への探求」、「プレイの自動化」、「パター技術」、「コミットメント」の因子得点の平均を位置づけた。またライフスキルには観測変数として、ライフスキル尺度である「計画性」、「情報要約力」、「自尊心」、「前向きな思考」、「親和性」、「リーダーシップ」、「感受性」、「対人マナー」までの因子得点の平均を位置づけ、岡林(2006)[18]、西岡ら(2009)[38]をもとに図 5 のモデルを作成し、構造方程式モデリング（SEM:Structural Equation Modeling ）によりモデルの検証を行い、変数間の因果関係を表す交差遅れ効果 a,b について 2 波の交差遅れ効果モデルを用いて、モデルの検証を行った。a が有意な正の値のとき、ゴルフパフォーマンスはライフスキル獲得に繋がるという因果関係が推定され、b が有意な正の値のときはライフスキルを獲得することによって、ゴルフパフォーマンスが促進されるという因果関係が推定される。しかしながら、STEP2 において、ハンディキャップを低下させる要因もあるため、b が有意な負の値のとき、ライフスキルを獲得することで、ゴルフパフォーマンスを低下させる要因を理解するといった因果関係も推定される。そしていずれの交差遅れ効果も有意でない場合は、変数間に因果関係は存在しないと解釈される。なおすべての分析には Microsoft Office Excel 2010、IBM SPSS Statistics21、IBM SPSS Amos 21 を使用した。

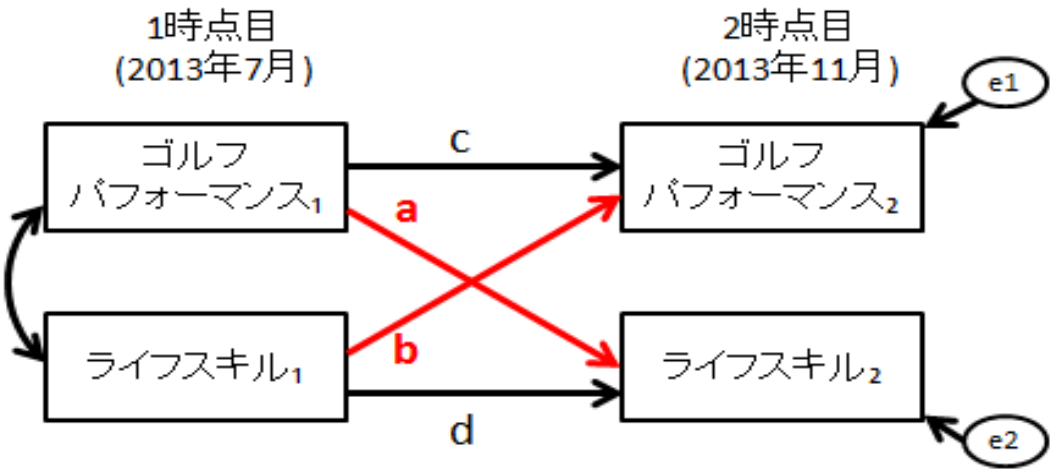

図 5　STEP3 における分析モデル

第 5 章　結果

第 1 節　各尺度の妥当性と信頼性の検討

確認的因子分析だが、一般的にモデルの適合度指標は CFI、GFI、AGFI、RMSEA の値によって検討される(小塩,2008)[23]。CFI、GFI 、AGFI はともに 0 から 1 までの値をとり、1 に近づくほど適合が良いとされている。GFI=.90 以上がモデルを採択する基準とされ、AGFI が GFI に比べ著しく低下する場合は良いモデルとは言えない(豊田,1992)[37]。しかし、田部井(2001)[35]によると、観測変数が 30 以上あるモデルの場合、GFI の値は基準値である.90 を超えないことが指摘されており、その場合は CFI を用いることが推奨されている。また RMSEA に関しては、一般的に.05 が基準として用いられるが、小塩(2008)[23]、田部井(2001)[35]によると.05 から.08 の場合には穏当な適合度であるという指摘もあり、以上のことを踏まえたうえでモデルのあてはまりについての検討を行った。分析の結果、ライフスキル尺度は CFI=.904、GFI=.891、AFFI=.854、RMSEA=.058 となり、一定の当てはまりの良さが確認された。ゴルフパフォーマンス尺度は、CFI=.819、RMSEA=.053 となったが、観測変数が 30 以上あるので、ある程度の当てはまりの良さが確認された。

次に信頼性の検討だが、Cronbach α 係数により検討した。その結果、表 4 に示したようにライフスキル尺度の計画性 α=.74、情報要約力 α=.70、自尊心 α=.65、前向きな思考 α=.69、親和性 α=.74、リーダーシップ α=.83、感受性 α=.66、対人マナー α=.79 となり、一定の信頼性が得られた。ゴルフパフォーマンス尺度は表 5 に示したように心理的準備 α=.67、精神的強さ α=.64、飛距離への挑戦 α=.78、リスク回避 α=.56、ネガティブな情動・認知 α=.55、改善への探求 α=.51、自動化 α=.62、パター技術 α=.81、コミットメント α=.62 となり、一部低い数値が見られたが、ゴルフパフォーマンス尺度を開発した、平木・橋本(2006)[45]の研究においても α=.60 前後であったことと、調査対象者が似ていること。また社会心理学の領域における研究では(福岡,2003)[47]、 α=.60 前後でその後の分析に使用していたことから、本研究では、以降今後の分析に使用するものとした。しかしながら信頼性に関して若干、課題の残る結果となったことから、今後はより詳細な精査を行い、見

直す必要があると考えられる。

表 4　ライフスキル尺度の Cronbach α 係数と因子負荷量

項目		α	因子負荷量
計画性	12.課題が出ると提出期限を自ら決める工夫をしてやる気を引き出す	.74	.64
	16.やるべきことをテキパキと片づけることができる		.78
	20.先を見通して計画立てることができる		.68
情報要約力	1.数多くの情報の中から、本当に自分に必要な情報を手に入れられる	.70	.59
	3.手に入れた情報をもって、より価値の高いものを(資料等)を生み出せる		.59
	11.多くの情報をもとに自分の考えをまとめることができる		.78
自尊心	7.自分のことが好きである	.65	.49
	13.自分の今までの人生に満足している		.53
	14.自分の言動に対して自身を持っている		.83
前向きな思考	5.嫌なことがあっても、いつまでもくよくよと考えない	.69	.74
	18.何かに失敗した時にすぐに自分はダメな人間だと思ってしまう(R)		.61
	21.困ったときでも「なんとかなるだおろう」と楽観的に考えることができる		.62
親和性	8.どんな内容のことでも友人らと本音で話し合うことができる	.74	.65
	19.困ったt恋に、友人らに気軽に相談することができる		.72
	23.親身になって友人らに相談に乗ってもらうことができる		.72
リーダーシップ	9.自分が行動をおこすことによって、周りの人を動かすことができる	.83	.78
	15.話し合いの時にみんなの意見を1つにまとめることができる		.81
	22.集団で行動するときに先頭に立てみんなを引っ張っていくことができる		.79
感受性	2.悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる	.66	.50
	6.困っている人を見ると援助してあげたくなる		.50
	24.他人の幸せを自分のことのように感じることができる		.83
対人マナー	4.年上の人に対しては敬語を使うことができる	.79	.71
	10.目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる		.87
	17.初対面の人に対しては言葉使い等に気を配ることができる		.64

表 5　ゴルフパフォーマンス尺度の Cronbach α 係数と因子負荷量

項目		α	因子負荷量
心理的準備	2.パッティングの前に、私は自分のストロークとカップの中へ入っていくボールをイメージすることができる	.67	.58
	11.ショットをする前に、私は心の中で書くショットのリハーサルをする		.67
	20.各ストロークの前に、私はボールが行き着く場所をイメージしている		.62
	29.私には一定のショット前のルーチン（打つ前の決まった動作）がある		.49
精神的強さ	3.私はプレッシャー下でベストなプレイをする	.64	.63
	12.私は、精神的に強いゴルファーである		.67
	21.私は試合よりも練習の時の方が上手くプレイできる(R)		.40
	30.私は最初のティーショットの前は不安になることがよくある(R)		.52
飛距離への挑戦	4.私は、競争相手より遠くに飛ばしてやろうと思っている	.78	.79
	13.私は、組の中で一番遠くに飛ぶと、とても満足する		.69
	22.ティーショットでは、私はできるだけ遠くへボールを飛ばすように努めている		.74
リスク回避	5.私は、コースで危険を冒すよりむしろ安全にショットすることが好きである	.56	.58
	14.私は、バンカーの近くのカップを狙うより、むしろグリーンの中央を狙ってプレイする		.46
	23.もしハザードを超えられるかどうか確信できなければ、刻む		.49
	31.ゴルフをするとき、私は何か新しいことを試みるより、むしろ自分が出来る事を考える		.42
ネガティブな情動・認知(R)	6.私は試合中、終わったホールでのミスやチャンスについて思いめぐらすことがある(R)	.55	.42
	15.ゴルフ競技中、私はしばしば否定的なセルフトーク（独り言・自己会話・心の声）を使う(R)		.28
	24.下手なショットをすると、腹が立ち、イライラする(R)		.44
	32.私は調子が悪い時気持ちが滅入る傾向がある(R)		.71
改善への探求	7.メジャーな試合でのプロのプレイを見てゴルフについて学んでいる	.51	.51
	16.過去1年間、私はグリップもしくはスイングを調整してきた		.49
	25.私は大きな試合の前の日に練習ラウンドをしたい		.43
	33.私は、ゴルフのラウンド直前にパッティングの練習をする		.40
プレイの自動化	8.私のアイアンショットは飛距離が一定している	.62	.62
	17.私のスイングは安定している		.72
	26.私はラウンド中、ボールを（1球以上）球をなくすことがよくある(R)		.44
	34.実際にショットするとき、私は考えすぎることなく体が自然と動くようだ		.46
パター技術	9.パッティングは、私の勝負強さの1つである	.81	.85
	18.私は、グリーンを読むのが得意である		.68
	27.私のパッティングは不安定である(R)		.79
コミットメント	1.現在、ゴルフを上手くプレイすることは、私の人生の中で重要なことである	.62	.66
	10.プレイをしていない日に私は、ゴルフのことを考えることがよくある		.58
	19.私はゴルフをするとき、競争心が旺盛になる		.49
	28.私は自分のハンディキャップ（またはスコア）を減らすように試みている		.39
	35.私は競技ゴルフよりも社交ゴルフをする方が好きである(R)		.38

第2節　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの関係

第1項　基本的属性

調査の結果、得られたデータの基本的属性を表 6 に示した。まず性別だが、男子の割合が 7 割以上を占め、女子が 2 割程度であった。学年は 1 年生から 4 年生となり、学年による差はあまりないが、年齢は 18 歳から 24 歳までとなっている。ゴルフ歴は 6 年以上 10 年以下の割合が半数以上を占めた。HC は-5 以上 0 以下が約 3 割弱占める結果となった。これは常にゴルフの基本となる 72 より少ない打数、いわゆるアンダーパーでホールアウトする学生が 3 割弱いることになる。またシングルプレーヤーと呼ばれる 1 以上 9 以下は半数以上を占める結果となり、対象者はゴルフ上級者という結果となった。

表 6　STEP2 の基本的属性

	n	%		n	%
性別			大学別		
男子	130	76.0%	A大学	28	16.4%
女子	41	24.0%	B大学	24	14.0%
年齢			C大学	32	18.7%
18歳	35	20.5%	D大学	30	17.5%
19歳	40	23.4%	E大学	9	5.3%
20歳	45	26.3%	F大学	15	8.8%
21歳	35	20.5%	G大学	20	11.7%
22歳	12	7.0%	H大学	13	7.6%
23歳	3	1.8%	ゴルフ歴		
24歳	1	0.6%	1年以上～5年以下	49	28.7%
学年			6年以上～10年以下	90	52.6%
1年	47	27.5%	11年以上	32	18.7%
2年	46	26.9%	HC		
3年	43	25.1%	－5以上～0以下	40	23.4%
4年	35	20.5%	1以上～9以下	90	52.6%
			10以上～17以下	23	13.5%
			18以上～27以下	10	5.8%
			28以上	8	4.7%

第 2 項　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの重回帰分析結果

1 回目(7 月)のデータを用いて、霜島・木村(2013)[29]の手続きを参考に重回帰分析を行った。分析結果は図 6 に示した。重回帰分析の結果(注 3)、「精神的強さ」に 1%水準で統計的に有意な関係が見られ、「飛距離への挑戦」、「リスク回避」、「プレイの自動化」に 5%水準で統計的に有意な関係が見られた。それ以外のパスには有意性は確認されなかった。そしてモデルの説明力を示す、R^2 の値は 0.219 となりこのモデルからハンディキャップの 21.9%が説明されたことになる。また求めた重回帰式の予測力に関する検定であるが、0.1%水準で統計的な有意性が見られ、このモデルにはある程度の予測精度があることが示された。なお、重回帰分析においては、小塩(2004)[22]が指摘するように多重共線性の問題が考えられるが、この問題を診察する上で指標になる VIF の値を算出したところ、すべてのゴルフパフォーマンス要因において VIF は基準値である 10 未満となった。これにより、多重共線性は発生していないことが確認された。

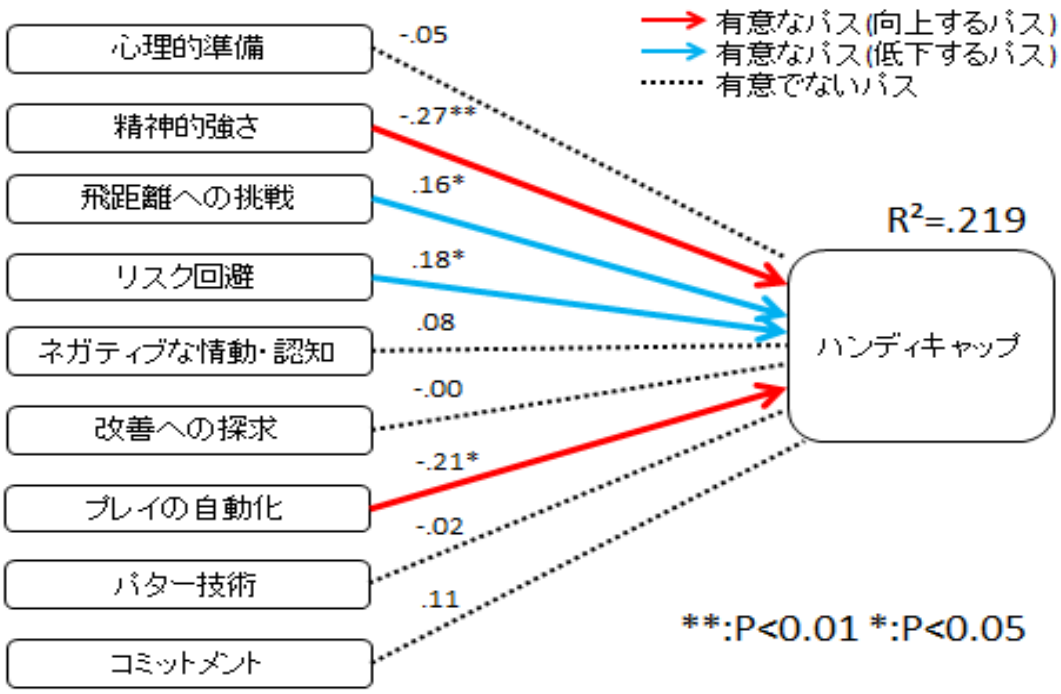

図 6　重回帰分析結果

第 3 節　ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係

第 1 項　基本的属性

2 回の調査の結果、得られたデータの基本的属性を表 7 に示した。基本的属性は STEP2 とほぼ同様の結果となった。しかしながら 7 月、11 月の調査に不備なく回答したものを対象とし、縦断的な調査をする STEP3 では学年の人数に差が見られた。ゴルフ歴は STEP2 と同様に 6 年以上 10 年以下の割合が半数を占める結果となった。

表 7　STEP3 の基本的属性

	n	%
性別		
男子	161	74.2%
女子	56	25.8%
年齢		
18歳	49	22.6%
19歳	56	25.8%
20歳	52	24.0%
21歳	41	18.9%
22歳	14	6.5%
23歳	3	1.4%
24歳	2	0.9%
学年		
1年	65	30.0%
2年	60	27.6%
3年	53	24.4%
4年	39	18.0%
大学別		
A大学	33	15.2%
B大学	31	14.3%
C大学	41	18.9%
D大学	33	15.2%
E大学	13	6.0%
F大学	22	9.2%
G大学	20	10.1%
H大学	24	11.1%
ゴルフ歴		
1年以上～5年以下	75	34.6%
6年以上～10年以下	107	49.3%
11年以上	35	16.1%

第 2 項　各変数の基本統計量

表 8 に 2 つの時点における各変数の基本統計量を示した。その結果、ゴルフパフォーマンス、ライフスキルについて、比較的高い値が得られ、ゴルフパフォーマンス、ライフスキルともに、日々の活動において、ある程度安定的に得られるものであることが示された。

最も高い数値だったのは、ゴルフパフォーマンスの「心理的準備」とライフスキルの「対人マナー」であり、最も低い値は、ゴルフパフォーマンスの「ネガティブな情動・認知」とライフスキルの「リーダーシップ」である。

表 8　各時点における変数の基本統計量

		2013年7月		2013年11月	
		1時点目		2時点目	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
ゴルフパフォーマンス	心理的準備	3.11	2.24	3.16	1.96
	精神的強さ	2.40	2.54	2.42	2.35
	飛距離への挑戦	2.31	2.30	2.35	2.27
	リスク回避	3.03	2.15	3.08	2.09
	ネガティブな情動・認知(R)	2.28	2.40	2.21	2.31
	改善への探求	3.19	2.21	3.21	2.00
	プレイの自動化	2.47	2.33	2.56	2.29
	パター技術	2.43	2.48	2.50	2.33
	コミットメント	3.01	2.87	3.02	2.59
ライフスキル	計画性	2.61	2.01	2.67	1.84
	情報要約力	2.79	1.61	2.86	1.61
	自尊心	2.54	1.95	2.57	1.87
	前向きな思考	2.76	1.30	2.76	1.37
	親和性	2.86	1.93	2.89	1.95
	リーダーシップ	2.44	2.07	2.49	2.01
	感受性	3.01	1.66	3.02	1.71
	対人マナー	3.49	1.53	3.52	1.40

第 3 項　2 波の交差遅れ効果モデルの結果

各モデルの適合度指標の値は GFI=1.00～.909、GFI=1.00～.957、AGFI=1.00～.537、RMSEA=0.00~.321 という結果となった。CFI、GFI についてはいずれも高い数値を示した

が、AGFI、RMSEA については一部の交差遅れ効果モデルにおいて低い数値となった。若干、課題が残る結果となったが、全体的にモデル適合度は高い数値を示したことと、有意関係が見られたモデルはモデル適合度が良かったことを踏まえ、変数間の因果関係を解釈するモデルとして利用可能であると判断した。

次に変数間の因果関係の結果だが、ゴルフパフォーマンスを起点とする因果関係 a について表 9 をもとに図 7 の有意な関係について述べる。「リスクを回避」から「情報要約力」、「前向きな思考」、「対人マナー」に 5%水準で統計的に有意な関係が得られた。また「ネガティブな情動・認知」から「情報要約力」に 0.1%水準で、「前向きな思考」に 1%水準で、「親和性」、「感受性」に 5%水準で統計的に有意な関係が確認された。そして「改善への探求」から「自尊心」に正の有意な関係が確認され、「前向きな思考」に負の有意な関係が確認された。どちらも 5%水準の統計的有意差である。これらはゴルフパフォーマンスを獲得することで、ライフスキル獲得に繋がる結果となった。しかしながら「改善への探求」から「前向きな思考」については、ゴルフパフォーマンスを獲得することで、ライフスキルを獲得することができない結果となった。

またライフスキルを起点とする因果関係 b について表 10 をもとに図 8 の有意な関係について述べる。「計画性」から「心理的な準備」、「プレイの自動化」に正の有意な関係が確認されたが、「飛距離への挑戦」、「リスク回避」に負の有意な関係が確認された。また「情報要約力」から「プレイの自動化」に正の有意な関係が確認され、「パター技術」、「コミットメント」に負の有意な関係が確認された。さらに、「リーダーシップ」から「プレイの自動化」に正の有意な関係が確認され、「感受性」から「飛距離への挑戦」、「リスク回避」に負の有意な関係が確認された。これらはすべて 5%水準で統計的に有意な関係が確認された。正の有意な関係が見られたのは、ライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」から「心理的準備」、「プレイの自動化」であるが、「プレイの自動化」はハンディキャップに影響を与える要因であるため、ライフスキル獲得によりゴルフパフォーマンスは

向上され、ハンディキャップも向上する結果が得られた。

以上の結果より、双方向の因果関係は存在しておらず、必ずどちらかを起点として因果関係が成立していることが明らかとなった。よってゴルフパフォーマンスを獲得することでライフスキルを獲得する結果が得られた。またライフスキルを獲得することで、ハンディキャップに影響を与えるゴルフパフォーマンスを促進することが明らかになった。

表 9　ゴルフパフォーマンスを起点とする因果関係(a の値)　n=217

			11月							
			ライフスキル							
			計画性	情報要約力	自尊心	前向きな思考	親和性	リーダーシップ	感受性	対人マナー
7月	ゴルフパフォーマンス	心理的準備	-.04	.04	.09	.07	-.01	.03	.09	.07
		精神的強さ	-.05	.05	-.10	.13	.03	-.02	.00	-.04
		飛距離への挑戦	.01	.00	.02	-.09	-.03	-.05	.00	-.07
		リスク回避	.02	.11*	.08	.14*	.07	.02	.09	.14*
		ネガティブ(R)	.10	.20***	.00	.18**	.12*	.06	.13*	.04
		改善への探求	.00	-.01	.10*	-.13*	.00	.09	.08	.02
		プレイの自動化	-.04	.05	-.03	.05	-.04	-.04	.07	.06
		パター技術	-.02	.06	.01	.21	.03	.06	.11	.07
		コミットメント	-.03	.02	.10	.01	-.08	.01	.04	-.01

注) *P<0.05
注) **P<0.01
注) ***P<0.001
注) ネガティブはネガティブな情動・認知

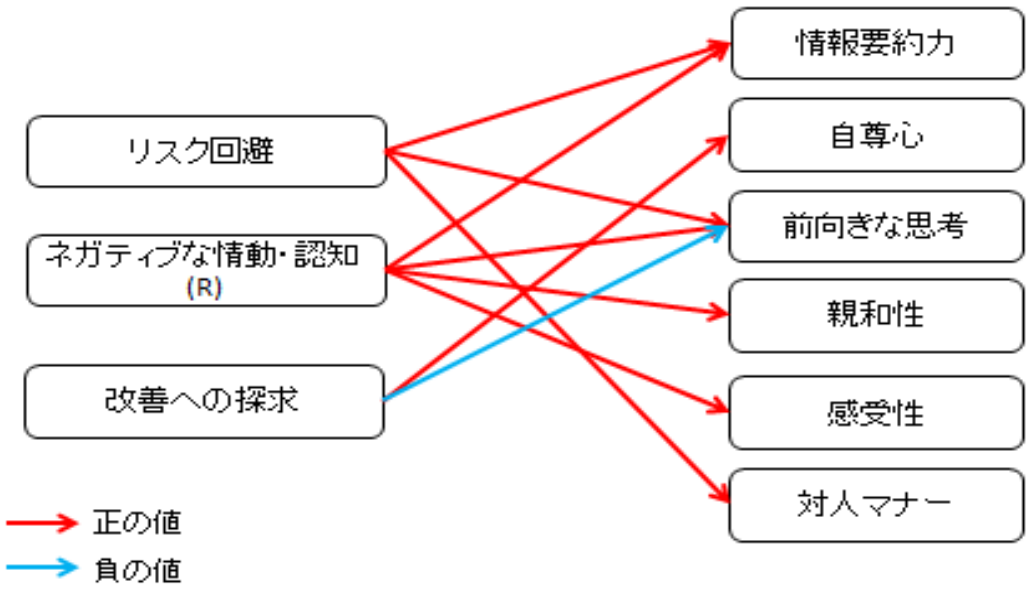

図 7　ゴルフパフォーマンスを起点とし有意な関係が確認された因果関係(a のパス)

表 10　ライフスキルを起点とする因果関係(b の値)　n=217

			11月								
			ゴルフパフォーマンス								
			心理的準備	精神的強さ	飛距離への挑戦	リスク回避	ネガティブ(R)	改善への探求	プレイの自動化	パター技術	コミットメント
7月	ライフスキル	計画性	.13*	.08	-.14*	-.14*	.11	.11	.11*	-.04	-.04
		情報要約力	.07	.06	-.04	-.04	-.04	-.04	.10*	-.11*	-.11*
		自尊心	.10	.06	-.01	-.01	.08	.08	.09	-.07	-.07
		前向きな思考	-.04	-.04	-.04	-.04	.05	.05	-.03	-.04	-.04
		親和性	-.01	.06	-.05	-.05	.08	.08	.02	-.02	-.02
		リーダーシップ	.05	.08	-.03	-.03	.08	.08	.10*	.01	.01
		感受性	-.02	.02	-.12*	-.12*	.09	.09	.03	.04	.04
		対人マナー	.08	.07	-.06	-.06	.09	.09	.05	.03	.03

注)　*P<0.5

注) ネガティブはネガティブな情動・認知

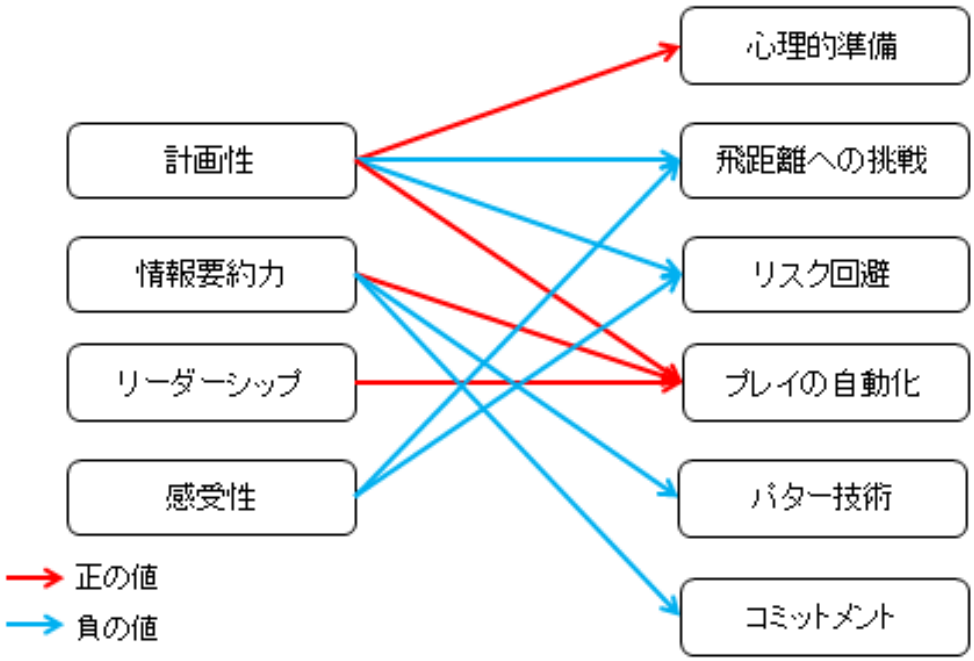

図 8　ライフスキルを起点とし有意な関係が確認された因果関係(b のパス)

第 6 章　考察

第 1 節　ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの関係についての考察

各自の実力を表すハンディキャップと、ゴルフのレベルアップに必要な認知的スキルをゴルフパフォーマンスと捉え検証した。その結果、ゴルフパフォーマンスにおける、「精神的強さ」、「プレイの自動化」がハンディキャップを向上させる要因であることが明らかになった。これは試合に対して不安がなく、プレッシャーの下でもベストなプレイができるといった、精神的に強い学生と、実際にショットするときに自然とスイング出来るほど、スイングが安定している学生はハンディキャップを向上することを意味している。これらは、Pederson(2000)[10]が、ゴルフは他のスポーツと比べ、心理面の重要性を認識しているスポーツであると述べていることを、実証した結果であると考えられる。またプレイの自動化については、予想通りの結果であるが、ハンディキャップを向上させるためには、スイングを構築するための練習が必要不可欠であることを提示する結果である。

しかしながら「飛距離への挑戦」、「リスク回避」はハンディキャップを低下させる要因であることが明らかになった。これは、積極的な考え、消極的な考え、どちらに偏っても、ハンディキャップを低下させることを意味している。言い換えれば、その場にあったプレイが必要であり、ハンディキャップを向上するためには、自分自身の調子や、コースに対して柔軟に対応し、時には攻め、時には安全にプレイするといった臨機応変なプレイが必要であることが推察される。ゴルフはコースと呼ばれる場所で試合が行われるが、その形態はコースによって様々である。そのため「コースマネジメント(注 4)」というコースを攻略するための方法があるが、本研究の結果はコースマネジメントの必要性を裏付ける結果となったと推察される。また、学生が上達するために、飛距離が足りない、ショットの精度が悪いということでスイング改造を行うことは適していない可能性がある。なぜなら「プレイの自動化」、いわゆるスイングの再現性を高めることで、ショットの距離が一定になり、ハンディキャップを向上する。飛距離アップや方向性の向上を目的としたスイング改造は、プレイの自動化に繋がらないからである。あくまでも筆者の経験によるものだが、今まで

飛距離アップ、方向性の向上のためにスイング改造を行ったもので、成功したケースは数少ない。よって学生や、監督・コーチといった指導者も、スイング改造を行う理由を明確にし、取り組む必要があるだろう。

以上により「精神的強さ」、「プレイの自動化」が、ハンディキャップを向上させる要因であることが明らかになった。また、統計的に有意は関係なく、パスの数値も低いが、心理的準備、改善への探求、パター技術といった要因はマイナスのパスが確認されたことから、これらの要因はハンディキャップを向上させる可能性があるのではないかと考える。この件に関しては今後、より詳細な調査を実施し、検証する必要があるだろう。

第 2 節　交差遅れ効果モデルにおける各変数の基本統計量についての考察

各変数の基本統計量についてだが、「ネガティブな情動・認知」については、2 時点目の値が減少する結果となった。これは夏休みを通して試合数、合宿が増加したことで、よりナーバスになってきた可能性がある。また「前向きな思考」も 2 時点目に低下した。このこともゴルフパフォーマンスのネガティブな情動・認知と同様のことがいえる可能性がある。「対人マナー」は最も高い値であったが、この理由として、ゴルフというスポーツが、伝統や格式を重んじるスポーツであることが、この結果となったと推察される。また「リーダーシップ」は最も低い値となった。これは個人スポーツであるゴルフにおいて、リーダーシップが低い値となったことは筆者の予想と異なる結果となった。これは筆者が個人スポーツは皆、リーダー的な存在であるという偏見があったからではないかと考えられる。しかしながら団体スポーツは、選手間の連携が必要とされ、チームをまとめるリーダーが必要だが、個人スポーツは自分自身がリーダーである。そのためリーダーシップをとる必要がないことを意味しているのかもしれない。

第 3 節　変数間の因果関係についての考察

変数間の因果関係について 2 波の交差遅れ効果モデルについて検討した。その結果、双方向の因果関係は存在していないことが明らかになり、必ずどちらかを起点として、因果関係が成り立つことが明らかになった。また本研究では 7 月と 11 月に調査を実施したため、4 か月のインターバルがある。この期間には夏休みがあり、試合や合宿、部活動も活発に行われたと考えられる。そのため学生は夏休みを通じてゴルフパフォーマンスやライフスキルを獲得することも示された。

第 4 節　ゴルフパフォーマンスを起点とする因果関係についての考察

ゴルフパフォーマンスを起点とする因果関係については、「リスク回避」が「情報要約力」、「前向きな思考」、「対人マナー」に正の影響があることが示された。

「リスク回避」とは、ゴルフにおいて、危険を冒さず安全にプレイすることである。安全にプレイするためにはコースの状況を入手し、自分自身の調子を客観的に判断しなければならない。判断するためにはこの先に起きる結果も予想することが必要である。そのため情報要約力、いわゆる多くの情報の中から自分自身で考えをまとめることができるようになったと推察される。またリスク回避に必要な先のことを考えなければならないことが、後ろを向いても仕方がないといった先を見通すことができるようになり、前向きな思考を獲得したと予想される。またリスク回避にはトラブルを起こさないようプレイすることも含まれる。そのため、対人マナーといった人間関係のトラブルを避けるために、人に対する態度、言葉使い、礼儀作法といいた対人マナーの獲得に繋がったと考えられる。

「ネガティブな情動・認知」が「前向きな思考」、「感受性」、「情報要約力」、に正の影響があることが示された。まず、ネガティブな情動・認知と前向きな思考に着目すれば、ゴルフ場面においてネガティブな感情になりにくい学生は、日常生活で前向きに捉える傾向があることが示唆された。また感受性に正の影響があったことは、競技場面において失敗しても後悔していては、前に進まないことを把握しているので、相手の気持ちを理解し、

相談に乗ることができることに繋がったと推察される。情報要約力においては0.1%水準で正の影響があった。これは前述したように、競技場面において、失敗した時こそ前を向かなければ解決できないと考え、様々な人に意見をもらい、自分自身を成長させるためには何が必要か考える過程で得られたのではないかと推察される。

「改善への探求」は「自尊心」に正の影響を、「前向きな思考」に対して負の影響を与えていたことが明らかになった。「自尊心」へ正の影響が確認されたことは、ゴルフのスイングやグリップにおいて、人のプレイから自分自身に繋がるものはないかと考え取り組み、ゴルフの成績が向上されたことが原因で、自信を持てるようになったと考えられる。また「前向きな思考」に対して負の影響が確認されたことは、改善しようと試みたが、失敗したことで落ち込んでしまうことである。つまり、改善しようと努力した過程ではなく、その結果に対してライフスキルに変化があったと推察される。

以上のことより、ハンディキャップを向上する要因である「精神的強さ」、「プレイの自動化」からはライフスキルを獲得するという因果関係は存在しなかったが、「リスク回避」、「ネガティブな情動・認知」、「改善への探求」がライフスキル獲得に影響していることが明らかになった。これらの要因は、ハンディキャップを直接的に向上する要因ではないが、ゴルフをするうえで必要不可欠であると考える。そのため、自身の実力には繋がらなくても、自分自身で安全にプレイすべきなのか、調子が悪くても頑張ろうと考えることが、ライフスキルを獲得することである。自分のゴルフを考える行為、すなわち、結果ではなく、その過程を大切にすることが、ライフスキルの獲得に繋がる可能性があるだろう。ゴルフパフォーマンスがライフスキル獲得に繋がることは、大学ゴルフ部に所属し、ゴルフを通じて、社会で必要とされていることを学ぶことができるという意義を見出す結果ではないかと考える。

第５節　ライフスキルを起点とする因果関係についての考察

ライフスキルを起点とする因果関係だが、「計画性」から「心理的準備」、「プレイの自動化」へ正の影響があることが示された。計画性とは先を見通して計画を立て、やるべきことを期限内に終わらせるといった、備えることである。日常生活において、計画性を持って行動することが、ゴルフにおいてもショットするボールをイメージするといった、備えに繋がることが示唆された。またスイングを安定させるために必要である練習をするといった、スイングの準備することに繋がることも示唆された。また STEP2 においてハンディキャップを低下させる要因である「飛距離への挑戦」、「リスク回避」には負の影響が示された。これは先を見通して物事を考えることで、飛距離へのこだわり、リスクを回避するといった、両極端なプレイを行わなくなることである。なぜなら計画性とは準備することであり、ゴルフにはコースマネジメントを取り入れる必要性がある。コースマネジメントはコースを攻略するために計画を立てることであるため、日常生活を計画的に行動することが、コースマネジメントを促進し、リスクを回避する可能性が示唆された。よって負の因果関係が示唆されたが、ハンディキャップを低下させる要因であるため、計画性を獲得することで、ハンディキャップを向上させるために必要な要因を獲得することが推察される。

「情報要約力」から「プレイの自動化」に正の影響が示された。これは多くの情報の中から自分自身で考えをまとめることができるようになることで、安定したスイングを獲得できることである。スイングを安定させるためにはスイング改造が必要である。スイングを改造することは皆盛んに取り組んでいることだが、近年では情報化社会となり、様々なスイング理論が飛び交っている。その多くのスイング理論の中から、自分の課題を克服するために、自身の体形や、考えにあったものを取り入れ、スイング改造を行わなければならない。そのため、情報要約力は必要不可欠であり、情報要約力を獲得することで、自分に適したスイング理論を考えることができるようになり、スイングを安定させることに繋

がったと推察される。しかしながら「情報要約力」は「パター技術」、「コミットメント」に負の影響を示した。「情報要約力」が「パター技術」に負の影響を与えるということは、多くの情報の中から自分で考えを集めすぎ、迷いが生じてしまいパットに自信がなくなり、パットを苦手と考えることである。パットには「イップス」と言われるパターにおける精神的な病がある。これは長年ゴルフを続けている人の多くがかかる病であり、明確な解決策はない。そのため様々な情報収集を行い、治る方法を模索するがイップスを克服できた人はわずかである。このイップスだが、ゴルフを始めたばかりの初心者がかかる病ではないことから、パットは理論を構築して上達するのではなく、個人個人の感性を大切にすることが求められている可能性があるだろう。次に、「情報要約力」「コミットメント」に負の影響を与える結果については、大学生の中にはプロ志望の学生もいれば、会社に就職する学生もいるということが理由だと考えられる。全体でみれば、会社に就職する者が圧倒的に多いので、大学生は広い視野を持ち、たくさんの情報収集を行う。そのため、ゴルフを人生において最も重要としない結果になったと考えられる。

「リーダーシップ」からはハンディキャップを向上させる要因である「プレイの自動化」に正の影響が示された。このリーダーシップは表 8 の基本統計量からも本研究で焦点を当てているライフスキル獲得の中で最も低い値を示した。これは第 5 章、第 3 節、第 2 項で前述したように、他の団体スポーツは、選手間の連携が求められるが、ゴルフは個人スポーツであり、選手間の連携が求められないため、チームとして皆をまとめる能力が欠如していると考えられる。しかしながらリーダーシップ、いわゆる皆をまとめチームを牽引することで、プレイの自動が向上される結果となった。言い換えれば、団体行動を行い、リーダーシップを獲得することで、スイングの安定につながることである。

大学ゴルフは年 2 回リーグ戦が開催されるが、どの大学もリーグ戦を重要としている。これはゴルフにおいても団体行動が求められているということである。ほとんどの学生は大学進学と同時に団体行動に戸惑うが、リーダーシップを獲得することで、プレイの自動

化が向上される、本研究の結果は今まで団体行動に対して、偏見を持っていた学生には有効な知見であると考える。また大学ゴルフ部が行っている日々の部活動、合宿といった団体行動は一見、個人の競技力と関係がないこともあるが、リーダーシップを向上させるためには必要不可欠な取り組みであることがいえるだろう。

「感受性」から「飛距離への挑戦」、「リスク回避」に負の影響が示された。思いやりがあり、他人の幸せも自分のことのように感じることができる学生は、ゴルフにおいて攻撃的でなく、保守的でもないことが示された。その原因として、感受性は相手の気持ちを考えられるということでもあるため、コースの罠、状態などを感じることができるようになり、コースを攻略するために必要な、コースマネジメントができるようになったと考えられる。

以上により、ライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」を獲得することで、ハンディキャップを向上させるために必要な、「プレイの自動化」を促進することが明らかになった。これは、プレイを自動化させるために、日々多くの時間を練習に費やしている学生にとっても、学生を指導している指導者に対しても、日常生活を見直すことが、競技力のさらなる向上に寄与する結果ではないかと考えられる。なぜなら、日常生活を見直し、「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」を獲得することで、スイングを安定させることに繋がるからである。しかしながら、ハンディキャップを向上させるもう一つの要因である「精神的強さ」に影響するライフスキルは確認されなかった。この結果は、プレッシャーの下でもベストなプレイができ、ショットする際、不安なくスイングできるといった精神的強さを向上させる要因は日常生活からの影響は小さいことを意味している。精神的に強くなるためには、日常生活ではなく、別の側面から検討する必要があるのではないかと考える。

第 7 章　結論

第 1 節　本研究によって得られた知見

本研究はゴルフにおける技能を向上させるには、ゴルフに必要な能力だけでなく、日常生活から見直す必要があることを提示するために、2 つの分析方法を用いて明らかにすることであった。目的を達成するために、大学ゴルフ部に所属する学生を対象とし質問紙調査によって分析を行い検証した。

その結果、ゴルフの技能を向上させるには、精神的強さと、スイングの再現性、コースマネジメントが必要であることが明らかとなった。またゴルフパフォーマンスとライフスキルの因果関係を検証した結果、ゴルフを通じて社会で必要とされていることを獲得できることが明らかとなった。さらに、日常生活を改善することで、ゴルフに必要な認知的スキルを獲得することが明らかとなった。

以上のことから、図 9 に示したように、ライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」を獲得することで、ゴルフパフォーマンスにおける「プレイの自動化」が向上し、ハンディキャップを向上する可能性が示された。これは、序論でも述べたように、日常生活から見直すことで、競技力も向上されることを証明する結果となったといえるだろう。今後選手は、ゴルフに必要な能力を身に着けるのではなく、日々の何気ない生活が、ゴルフへ影響していることを把握し、日常生活から改善する必要があるだろう。また監督・コーチといった指導者は、ゴルフだけでなく、日常生活から学生をマネジメントする必要がある。特に大学ゴルフは、プロゴルファーを目指すもの、企業へ就職するもの、専門職へ就くものと多種多様である。どちらにしても一社会人であり、大学卒業後は一人で、様々な困難を乗り越えなければならない。そのため、ライフスキルといった、日々の生活から学生をマネジメントすることが求められているといえるだろう。しかしマネジメントする上で気を付けなければならないのは、学生の将来像まで視野に入れながら、一人一人にあったマネジメントをする必要がある。そのことで、各学生にあったスキルが身に付き、大きく成長することができるだろう。

これまでの研究において、島本・石井(2010)[27]はスポーツ経験とライフスキルの因果関係について、双方向の関係があり、どちらを起点としているか明らかにされていなかった。しかし本研究の結果は、双方向の因果関係は存在しておらず、必ずどちらかを起点としていることが明らかにされた。これは指導者にとって、学生にアプローチする際、より的確にマネジメントできることに繋がる結果ではないかと推察される。さらに、清水・島本(2012)[28]は、競技成績とライフスキルの関係を横断的な調査によって、競技成績が高い者はライフスキルを獲得することを明らかにしたが、本研究では競技力に影響する要因を明らかにし、その要因とライフスキルの関係を縦断的な調査によって明らかにしたことで、競技成績を上げる過程を提示することができる結果となった。

図 9　STEP2 と STEP3 より得られたモデル

第 2 節　研究の限界

研究の限界としては、今回対象とし調査を実施した大学ゴルフ部に所属する学生は男子が 8 割弱、女子が 2 割程度であった。この割合は大学ゴルフにとって大きく変化するものではない。なぜなら女子は大学へ進学せず、高校卒業とともにプロの道を歩き始めるからである。そのため大学ゴルフ部を対象とした調査において女子のサンプル数を確保することは限界があると考えられる。また、STEP2 のゴルフパフォーマンスとハンディキャップの重回帰分析結果だが、決定係数が高くないことより、スコアを質問紙で調査することが難しい可能性が挙げられる。なぜなら、スコアは実際の結果であるが、質問紙は自己評

価であり、自身をどのように評価するかは、各自によって様々である。そのため過大評価する者もいれば、過少評価する者もいる。さらに、今回は大学ゴルフ部に所属する学生を対象としたため、本研究の結果が適用可能なのは大学ゴルフだけであり、すべてのゴルファーに一般化することができない点である。

第 3 節　今後の課題

今後の課題であるが、まずゴルフパフォーマンス尺度の見直しが求められている。因子負荷量が低い項目や Cronbach α 係数も低い値の項目が見られた。また国内においてゴルフパフォーマンスを図る尺度は 1 つしかない。今回は大学院に所属する学生、及び教員と精査したが、大学ゴルフ部の監督・コーチに対して質的調査を行い、より詳細な知見を得る尺度を開発する必要があるだろう。

次に今回は縦断調査の期間を大学運動部の試合日程を考慮し、先行研究から、筆者が独自に設定した。そのため 4 か月という期間であった。今回は有意な因果関係がいくつか見出されたが、岡林ら(1998)[19]によれば、初回の調査と次の調査の期間が長すぎると、本来の因果関係が見出されない可能性があると述べているので、今後は調査期間をより慎重に検討する必要があるだろう。

そして今回は関東大学ゴルフ連盟に所属する大学を対象とし分析を行った。これは大学ゴルフ部に所属している学生全体の傾向を見たことである。しかしながら、清水・島本(2012)は競技成績が高い者はライフスキルを獲得していると述べていることから、リーグ別、大学別といったグループ分けを行い、グループ間で違いがあるのか検討する必要があるだろう。また、実際の部活動に今回の結果を取り入れ、その後、学生がどのように変化するのか調査することが必要である。そのことにより、今回は全体に対して実践的示唆を提示したが、学生一人一人の考え方、大学の方針に合わせた、マネジメントを提供できるのではと考える。

最後に大学生を対象とした研究だけでなく、高校生、中学生といったジュニアゴルファーを対象とした研究も必要であろう。なぜなら今回の調査対象者も約半数がジュニア時代からゴルフを行っている者であり、ジュニア時代にどのような能力を身に着けるかは重要なことだと考える。

注

(注 1) ゴルフ界においてハンディキャップという定義はなされていない。ハンディキャップは日本ゴルフ協会が公認するものであり、自身の実力を数値化したものである。このハンディキャップを決定する基準は各国において異なるものであり日本ゴルフ協会が定めるハンディキャップは日本国内しか適用できない。またハンディキャップを取得するためには何枚ものスコアカードを提出する必要があり、取得後も定期的にスコアカードを提出する必要がある。そのためハンディキャップは自分自身の実力に合わせて変動がある。また従来では 36 を上限としていたが、現在ではアメリカと日本で適用できるハンディキャップに変更しようとする流れがなるため、ハンディキャップの上限も 36 ではない。この設定は諸外国との兼ね合いにより、決まっているものではない。

(注 2) リーグ戦は春季リーグ戦は 5 月中旬から 6 月初旬に開催される。また秋季リーグ戦は 8 月下旬から 9 月下旬に開催される。春季リーグ戦、秋季リーグ戦ともに約 1 か月間の実施期間があるが、各リーグによって実施時期が異なる。また春季リーグ戦において 1 部リーグのみ 5 日間競技であり、その他のリーグは 2 日間競技である。秋季リーグ戦はすべてのリーグにおいて、2 日間競技である。

(注 3)重回帰分析結果と考察(第 5 章、第 2 節、第 3 節)の見方だが、ハンディキャップは数値が低いほどゴルフのレベルが高いことを表している。そのこともありハンディキャップは反転項目である。しかしながらハンディキャップにおいては反転項目を修正していないため、解釈が逆になる。よって負の有意な関係はハンディキャップを向上し、正の有意な関係はハンディキャップを低下させることになる。

(注 4)コースマネジメントについて、定義されたものはないが、筆者が自身の経験と、大学

ゴルフ部の監督・コーチ、ゴルフ選手、ゴルフ豆辞典をまとめると、以下のように解釈する。コースマネジメントとはコースのレイアウト、コースのコンディション 、天候、ボールの状態、グリーンの状態とピンの位置、自分の能力などを考えて どのようにコースを攻略するかを考えることである。つまり、自分の置かれている状況とショット後に想像される結果に基づいて その都度 どんなショットが ベストかを決めることである。そして、その時に ゲームの流れや心理状態のコントロールなどを考慮することも 広義には コースマネジメントの一つと言える。

引用・参考文献(50 音順)

1. Danish, S. J.（2002）Teaching life skills through sport. In: Gatz, M., Messner, M. A., and Ball-Rokeach, S. J.（Eds.）Paradoxes of youth and sport. State University of NewYork Press: Albany, NY, 49-60.
2. Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D.（1993）Life development intervention forathletes: Life skills through sports. The Counseling Psychologist, 21 : 352-385.
3. Finkel, S. E.（1995）Causal analysis with panel data. Sage Publications: Thousand Oaks,CA.
4. Gold,D.and Carson,S(2008)Life skills development through sport:current status and future directions.International Review of Sport and Exercise Psychology.1(1):58-78.
5. Mahoney,M.J.,Gabriel,T.J.,and Perkins,T.S.(1987)Psychological skills and exceptional athletic performance.The Sport Psychologist,1:181-199.
6. Menard,S.(1991)Longitudinal research.Sage Publications:Newbury Park,CA.
7. Murakami,K.,Tokunaga,M.,and hashimoto,K.(2004)The relationship between health-related life skills and sport experience for adolescents.Human Performance Measurement,1:1-14.
8. Nishida,Tand Kato,E.(1994)Psychological skills test for golfers.2nd World Scientific Congress of Golf,Poster Abstracts.
9. Papacharisis, V., Goudas, M., Danish, S. J., and Theodorakis, Y.（2005）The effectivenessof teaching a life skills program in a sport context. Journal of Applied SportPsychology, 17 : 247-254.
10. Pederson,D. (2000) Perceived relative importance of psychological and physical factors in successful athetic performance. Perceptual and Motor Skills, 90:283-290.

11. Thomas,P.R.and Over,R.(1994)Psychological and psychomotor skills associated with performance in golf.The sport Psychologist,8:73-86.
12. SSF 笹川スポーツ財団,スポーツ白書(2011)SSF 笹川スポーツ財団,2010.
13. WHO(編). 1997 川端徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也(監訳). WHO ライフスキル教育プログラム. 大修館書店：東京.
14. 赤坂瑠以・坂元 章（2008）携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響―パネル調査による因果関係の推定―. パーソナリティ研究, 16：363-377.
15. 安藤玲子・高比良美詠子・坂元 章（2005）インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響. パーソナリティ研究, 14：69-79.
16. 上野耕平(2007)運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得,体育学研究,52:49-60.
17. 上野耕平・中込四郎(1998)運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究,体育学研究,43:33-42.
18. 岡林秀樹(2006)発達研究における問題点と縦断データの解析方法.パーソナリティー研究,特集論文,15(1):76-86.
19. 岡林秀樹・杉澤秀博・岸野洋久（1998）お年寄りの健康と人とのふれあい―縦断研究の意味するもの―. 豊田秀樹編 共分散構造分析[事例編]―構造方程式モデリング―. 北大路書房：京都, 83-90.
20. 狩野裕(2002)構造方程式モデリング、因果推論、そして非正規性.竹内啓編,多変量解析の展開.岩波書店:東京,115-124.
21. グラハム,D;白石豊（訳）.1992 ゴルフのメンタルトレーニング,大修館書店 .
22. 小塩真司(2004)SPSS と AMOS による心理・調査データ解析―因子分析・共分散構造分析まで,東京図書株式会社,東京.
23. 小塩真司(2008)はじめての共分散構造分析:AMOS によるパス解析,東京図書株式会社,

東京.

24. ゴルフ豆辞典.COM　http://www.mamejiten.com/index.htm

25. 島本好平・石井源信(2006)大学生における日常生活スキル尺度の開発,教育心理学研究,54,211-221.

26. 島本耕平・石井源信(2008)大学生における運動部活動経験尺度の開発,スポーツ心理学研究,原著論文,35(2):27-40.

27. 島本好平・石井源信(2010)運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定.スポーツ心理学研究, 原著論文,第 37(2): 89-99.

28. 清水聖志人・島本好平(2012)男子大学生レスリング競技におけるライフスキルと競技成績との関連.体育経営管理論集,研究資料,4:47-53.

29. 霜島広樹・木村和彦(2013)参加動機が感染糸へ与える影響についての検討―テニスを事例として―.スポーツ科学研究,10,12-25.

30. 杉山佳生(2004) スポーツとライフスキル. 最新スポーツ心理学 その軌跡と展望. 日本スポーツ心理学会,大修館書店:東京,74-77.

31. 鈴木 壮・中込四郎（1988）スポーツ経験による人格変容に関する研究展望. 岐阜大学教育学部研究報告(自然科学), 12：59-72.

32. 高比良美詠子（2006）子どものインターネット使用と社会的不適応の関係―パネル調査による因果関係の検討―. 発達, 27（105）：18-25.

33. 高比良美詠子・安藤玲子・坂元 章（2006）縦断調査による因果関係の推定―インターネット使用と攻撃性の関係―. パーソナリティ研究, 15：87-102.

34. 中央教育審議会（1996）21 世紀を展望した我が国の教育の在り方.

35. 田部井明美(2001)SPSS 完全活用法:共分散構造分析(Amos)によるアンケート処理,東京図書,東京.

36. 調枝孝治(2001)生存秩序としての体育・スポーツ心理学.体育の科学.51(1):21-24.

37. 豊田秀樹(1992)SAS による共分散構造分析,東京大学出版会,99-118.

38. 西岡八郎・星敦士(2009)夫のワーク・ライフ・バランスが妻の出産意欲に与える影響. 人口問題研究,特集Ⅱ,65(3),pp58-72.

39. 日刊スポーツ(2013),イライラ遼クラブたたきつけ／男子ゴルフ,nikkannsports.com. http://www.nikkansports.com/sports/golf/ishikawa/news/f-sp-tp1-20111023-853811.html(2011 年 10 月 23 日)

40. 日本ゴルフ協会ホームページ http://www.jga.or.jp/jga/jsp/index.html

41. 日本経済新聞(2006), 男子プロゴルフ、スコア改ざん、中西を処分へ,2006,9,20,朝刊,37.

42. 日本経済新聞(2011),石川遼選手を県警が書類送検、無免許運転容疑,2011,7,21,夕刊,15.

43. 日本経済新聞(2012),プロゴルフの女子選手が窃盗、山形、容疑で逮捕,2012,11,16,名古屋夕刊,社会面,36.

44. 日本経済新聞(2013), 考えて走る自覚促す、日体大監督・別府健至,日本経済新聞電子版. http://www.nikkei.com/article/DGXZZO50865130S3A120C1000000/(2013 年 1 月 26 日)

45. 平木貴子・橋本公雄・村上貴聡・藤永博・楠本恭久(2006)日本語版ゴルフパフォーマンス尺度―尺度作成および信頼性・妥当性の検討―.資料論文,スポーツ心理学研究,33(2):35-48.

46. 松本正志(2012)絆のフェアウェイ, エンターブレイン社.

47. 福岡欣治(2003)他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャルサポートの影響,対人社会心理学研究,3.

48. レーヤー:小林信也訳(1987)メンタルラフネス.

資料　ゴルフパフォーマンス（心理的要因）と日常生活スキルに関するアンケート

本調査は大学ゴルフ部に所属する学生のゴルフパフォーマンス（心理的要因）と日常生活スキルを把握することを目的とした調査です。ご記入頂きました回答に関しましては、すべて統計的に処理されますので、ご迷惑をおかけするようなことは決してございません。個人情報が第三者に伝わることもございませんので、率直にお答え頂きますよう、ご協力宜しくお願い致します。

早稲田大学大学院　スポーツ科学研究科　斉藤　麗　　指導教員　早稲田大学スポーツ科学学術院　教授　木村和彦

1　あなた自身のことについておたずねします

1-1　名前（　　）　1-2　性別（男・女）　1-3　年齢（　　）才　1-4　学年（　　）年

1-5　ゴルフ歴（　　）年　1-6　ハンディキャップ　（　　）

1-7　今季（4月からの）のベストスコア（試合：　　練習：　　）　1-8　6月のベストスコア（試合：　　練習：　　）

1-9　6月の平均スコア（試合：　　練習：　　）

1-10　今年の春のリーグ戦には選手として登録されましたか？　□登録された　□登録されていない

2　あなたの日常生活についておたずねします。

以下の質問について「4　とても当てはまる」から「1　全く当てはまらない」までの4段階で、当てはまる数字に○をして下さい。

	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
例）数多くの情報の中から、本当に自分に必要な情報を手に入れられる	4	(3)	2	1
1　数多くの情報の中から、本当に自分に必要な情報を手に入れられる	4	3	2	1
2　悲しくて泣いている人をみると、自分も悲しい気持ちになる	4	3	2	1
3　手に入れた情報を使って、より価値の高いもの（資料等）を生み出せる	4	3	2	1
4　年上の人に対しては敬語を使うことができる	4	3	2	1
5　嫌なことがあっても、いつまでもくよくよと考えない	4	3	2	1
6　困っている人を見ると援助をしてあげたくなる	4	3	2	1
7　自分のことが好きである	4	3	2	1
8　どんな内容のことでも友人らと本音で話し合うことができる	4	3	2	1
9　自分が行動を起こすことによって、周りの人を動かすことができる	4	3	2	1
10　目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる	4	3	2	1
11　多くの情報をもとに自分の考えをまとめることができる	4	3	2	1
12　課題がでると、提出期限を自ら決める等の工夫をしてやる気を引き出す	4	3	2	1
13　自分の今までの人生に満足している	4	3	2	1
14　自分の言動に対して自信を持っている	4	3	2	1
15　話し合いのときにみんなの意見を１つにまとめることができる	4	3	2	1
16　やるべきことをテキパキと片づけることができる	4	3	2	1
17　初対面の人に対しては言葉使い等に気を配ることができる	4	3	2	1
18　何かに失敗した時にすぐ自分はダメな人間だと思ってしまう	4	3	2	1
19　困った時に、友人らに気軽に相談することができる	4	3	2	1
20　先を見通して計画を立てることができる	4	3	2	1
21　困ったときでも「なんとかなるだろう」と楽観的に考えることができる	4	3	2	1
22　集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができる	4	3	2	1
23　親身になって友人らに相談に乗ってもらうことができる	4	3	2	1
24　他人の幸せを自分のことのように感じることができる	4	3	2	1

3　あなたがゴルフをプレイする時の心理状態についておたずねします。
以下の質問について「4　とても当てはまる」から「1　全く当てはまらない」までの4段階で、
当てはまる数字に〇をして下さい。

		とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
1	現在、ゴルフをうまくプレイすることは私の人生の中で重要なことである	4	3	2	1
2	パッティングの前に、私は自分のストロークとカップの中へ入っていくボールをイメージする	4	3	2	1
3	私は、試合の前のプレッシャー下でベストなプレイをする	4	3	2	1
4	私は、競争相手より遠くに飛ばしてやろうと思っている	4	3	2	1
5	私は、コースで危険を冒すよりむしろ安全にショットすることが好きである	4	3	2	1
6	私は試合中、終わったホールでのミスやチャンスについて思いめぐらすことがある	4	3	2	1
7	メジャーな試合でのプロのプレイを見てゴルフについて学んでいる	4	3	2	1
8	私のアイアンショットは飛距離が一定している	4	3	2	1
9	パッティングは私の勝負強さの一つである	4	3	2	1
10	プレイをしていない日に私は、ゴルフのことを考える事がよくある	4	3	2	1
11	ショットをする前に、私は心の中で各ショットのリハーサルをする	4	3	2	1
12	私は、精神的に強いゴルファーである	4	3	2	1
13	私は組の中で一番遠くに飛ぶと、とても満足する	4	3	2	1
14	私はバンカーの近くのカップを狙うより、むしろグリーンの中央を狙ってプレイする	4	3	2	1
15	ゴルフ競技中、私は否定的なセルフ・トーク（独り言・自己会話・心の声）を使う	4	3	2	1
16	過去１年間、私はグリップもしくはスイングを調整してきた	4	3	2	1
17	私のスイングは安定している	4	3	2	1
18	私は、グリーンを読むのが得意である	4	3	2	1
19	私はゴルフをするとき、競争心が旺盛になる	4	3	2	1
20	各ストロークの前に私はボールが行き着く場所をイメージしている	4	3	2	1
21	私は、試合よりも練習のほうがうまくプレイできる	4	3	2	1
22	ティーショットでは、私はいつもできるだけ遠くへボールを飛ばすように努めている	4	3	2	1
23	もしハザードを越えられるかどうか確信できなければ、ふつう刻む	4	3	2	1
24	下手なショットをすると、腹が立ち、イライラする	4	3	2	1
25	私は、大きな試合の前の日に練習ラウンドをしたい	4	3	2	1
26	私はラウンド中、ボールを（１球以上）なくすことがよくある	4	3	2	1
27	私のパッティングは、不安定である	4	3	2	1
28	私は、自分のハンディキャップ（またはスコア）を減らすように試みている	4	3	2	1
29	私には、一定のショット前のルーチン（打つ前の決まった動作）がある	4	3	2	1
30	私は、最初のティーショットの前は不安になることがよくある	4	3	2	1
31	ゴルフをするとき私は、何か新しいことを試みるより、むしろ自分ができることを考える	4	3	2	1
32	私は調子が悪い時、気持ちが滅入る傾向がある	4	3	2	1
33	私は、ゴルフのラウンド直前にパッティングの練習をよくする	4	3	2	1
34	実際にショットするとき、私は考えすぎることなく体が自然と動くようだ	4	3	2	1
35	私は競技ゴルフよりも社交ゴルフをするほうが好きである	4	3	2	1
36	私は、グリーンを読むのが苦手である	4	3	2	1

謝辞

まず指導教員である木村和彦先生には、大変お世話になりました。今までスポーツ一筋で生きてきた私を受け入れて下さりありがとうございます。木村和彦先生には学問を一から教わり、時には厳しく、時には優しく指導して頂いたことは、大変感謝しております。そのお蔭で充実した 2 年間を送ることが出来ました。

そして副査を引き受けていただいた作野誠一先生、正木宏明先生にも感謝しております。また作野誠一先生には、1 年時から何度もご相談やご意見をいただきました。さらにサブゼミにも参加させていただく中で、貴重な話を聞くことができ、大変感謝しております。

ゼミにて発表した際にご指導、ご指摘をしていただきました、石井十郎さん、霜島広樹さん、醍醐笑部さん、林子郁さん、望月拓実さんには大変感謝しております。また昨年、卒業された甲賀輝さん、田中唯さんにも 1 年間という短い期間ですが、ご指導、ご指摘いただき、感謝しております。

研究室の同期である、木村圭佑君にも大変感謝しております。同期は 2 人だけですが、木村圭佑君がいることで、刺激を受け研究に臨むことが出来ました。研究室以外でも、食事に行ったり、共に過ごす時間が多く、その中でも研究の話など様々な話をしたことが、良い思い出となっています。

またアンケート調査に協力していただいた、各大学の監督、コーチ、学生の皆様、私の無理なお願いを引き受けていただき感謝しております。

最後に大学ゴルフ部をはじめ、ゴルフという競技を発展させるため、今後も精進してまいります。

2014 年 1 月 10 日

斉藤　麗